

経済学の「多様性」を知ってほしい。 多様な経済を育むために。

1年生で必修の「市場と経済」を履修し、ミクロ経済学、マクロ経済学を「基礎→応用」と学んでいく。10年前に比べれば、高経大経済学部カリキュラムもずいぶん整ってきたものです。体系的カリキュラムのもと、皆さんしっかり「勉強」してください。

と、前置きしたうえで、学生諸君に言っておきたいのは、本屋に並ぶ「教科書」だけが経済学ではなく、教科書の世界が現実の経済では必ずしもないということです。初級から上級まで、世に経済学の教科書はあふれかえっていますが、そのほとんどは、新古典派経済学の体系に基づいています。現在、新古典派は経済学の主流を占めていますが、経済学の長い歴史の中には、いろいろな

学派があり、多様な考え方を育ててきました。「経済学」への関心を失わないために、そして、現実の「経済」をきちんと見据えるためには、教科書を学びつつも、それら多様な考え方に触れることが非常に重要です。

高崎経済大学の英語表記は、「Takasaki City University of Economics」です。英語的に通用するかどうかは分かりませんが、名前を見るかぎり、本学は「経済学のユニヴァーシティ」なのです。この壮大なネーミングは、たったひとつの

合理性、単純な人間観を熱心に説き、経済の多様なあり方、多様な生き方を体系的に除去するよりは、それらを育てていけるような、多様な経済学を目指そうという意気込みを表しているのではないかと私はそう解釈しています。定理と証明に喜びを感じるよりは、歴史学、社会学、生物学の成果に目を向けるべきだと述べたのは、数理経済学者フランク・ハーンですが、これに通ずるスタンスでしょう。

多様な経済学を学びきっかけになりうる本として、内田義彦『読書と社会科学』（岩波新書、1985年）、A.O.ハーシュマン『情念の政治経済学』（法政大学出版局、1985年）の2冊をまずは薦めておきます。「世を治め民を救う」（経世済民）学問の扉を開くには絶好の入門書です。

■世界経済論 I・II
■開発経済論

矢野 修一
(やの しゅういち)



1960年愛知県生まれ。滋賀県立膳所高校、京都大学経済学部卒業。同大学院経済学研究科博士課程単位取得。博士(経済学)。ジャージ姿で「蹴り」をやっているのを見かけても放っておくこと。